
題 言

廣井博士逝去後三年

忘れて良い事と、忘れてならぬ事の區別さへ出来なくなつて來た世相ではあるが。人間生活の眞實と、人類の幸福との爲に、各自が職分に如何に忠實でなくてはならぬかと言ふ事は我等は技術家として、工學者としての廣井勇博士に最も強く見るのである。

我等は廣井博士を忘れる事は出来ない。兎角忘れ勝にならんとする世俗ではあるが、我等は廣井博士を忘れてはならぬ。それは單に日本の技術や工學の爲のみではない。世界に於ける偉大なる工學者であつたからである。

本年十月一日は恰も博士逝いて滿三年に當る、博士に教へをうけた少數の人や、博士の老友數氏が俱に多摩墓地の廣井博士の墓前に參拜されたのは、近頃の善き行事の一であつた。

年々各地に於て廣井博士の名に依つてせめて其の偉大さを偲ぶ技術家の一人も多からん事を我等は希望して止まないものである。

新雜誌『土木工學』その他

新裝なつた『土木工學』第一號を拜見して我々同業として實に興味をひくものがある。

先づ思ひ出すのは、二十年前の創刊になつた『工學』の第一號と内容外觀相似たものがある。東京に於ける土木方面の中堅技術家を編輯委員と言ふ名目で二十名餘りも列べられたのは注目を引くのであるが、内容記事は大して新鮮味のあるものとも思はれない。幾ら大家の名を列べても内容の實力が伴はない雜誌は結局發展しない。

『工學』の第一號などは二十年前に發行したのであるが、仲々充實した記事が揃つてゐた。其の工學ですら、今日は微々として振はなくなつたのである。

要するに雜誌は、之を纏める編輯者の問題である。學者や研究家は天下に數多いのであるが、之に對し執筆せしむる編輯者の熱力があつて、能く之を纏めて行くなれば、相當立流な雜誌が出来るのである。

それに今一つは資金の問題である。資金がなくては纏るべきものも纏らない。幸に資金の點では工業雜誌社があり、編輯を纏める點では上田君の如き経験家があるので、新刊の『土木工學』も充分發達するであらうと思はれる。

折角新生の意氣を以て將來の發展に進まれん事を。

○

雜誌の經營も一種の社會事業である以上は大衆を相手とし、大衆と經濟を俱にしなければならぬ、筆ばかり達者でやつて行けるものでもない、口ばかり達者でやつて行けるものでもない。金と力ばかりでやつて行けるものでもない。いろんなものを綜合した常識の力が必要なのである。

○

雜誌位ひ初め易いものはない。權威ありと言ひ、或は權威なしと言ふも程度の問題で、何れも似たり寄つたりのもので、要するに紙と活字の集まりだ。此位誰にでもたやすくやり得るものはない。

特に知識階級のルンペンには最も手の下し易い事業である

今や雜誌社會は亂軍のいきほひで、群雄割據、戰國時代の有様とも見られる。政治經濟雜誌は特に然うであるが、近頃の技術雜誌も其傾向がある。殊に建築雜誌は無數に新雜誌が出来る。

古い歴史を有つ建築世界社から、最近分離した國際建築や、建築知識などは相當確實なものであるが、恰も親竹の下に生じた筍の如くまだ々々分離新生するであらう。

此も自然の運命だ。